

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K03065

研究課題名(和文) 子どもの社会性を支える「察する」心の発達心理学的研究

研究課題名(英文) Developmental psychological study about mindreading related to social cognition

研究代表者

林 創 (Hayashi, Hajimu)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：80437178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児期から児童期の子どもを対象に、「子どもの社会性を支える『察する』心の発達心理学的研究」に着目し、その発達過程を実証的方法で解き明かすことを目的とした。研究の結果、分配場面の社会性では、年齢が増すとともに、先行研究同様、利己的な分配から平等な分配を好むようになる平等バイアスと呼ばれる現象が見られるが、利益の分配と不利益の分配のいずれも、自分の分配数が他者と比べて多かるうと少なかるうと、自分一人が異なる状況を嫌う傾向があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会性の発達には、身近なことで、とくに分配にかかわることは、道徳性の発達とも密接に関係するため、教育的に関心の高いテーマである。本研究の知見により、初等教育で見逃しやすい点を示唆することができ、教育実践現場での指導がより有益なものとなることを見込まれることから、研究の社会的な意義につながると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to clarify the development about mindreading related to social cognition. The results of the study revealed that, as children get older, they prefer equal distribution to selfish distribution, as in previous studies, but they tend to dislike situations in which they are different from others, regardless of whether their own distribution is more or less than others in both the distribution of benefits and of disadvantages.

研究分野：発達心理学, 教育心理学

キーワード：社会性

## 1. 研究開始当初の背景

人間が生きていく上で不可欠となる特徴の1つは、社会性である。一口に社会性と言っても、その内容はさまざまなレベルで検討することが可能である。たとえば、社会学では、社会を構成するシステムに着目して、社会性を論ずることもあるだろう。心理学においても、心の働きに注目しながら、集団レベルでも個人レベルでも、さまざまな角度から検討することが可能であり、先行研究による知見がある。本研究では、発達の観点を入れながら、社会性について検討することにした。

発達心理学の研究では、子どもは一般に乳児期に共同注意ができるようになり、幼児期に標準的な誤信念課題に正答し、「心の理論 (theory of mind)」を身につける (e.g. Wellman et al., 2001) ことが広く知られている。心の理論とは、意図や知識や信念といった心的状態を想定しながら、行動を解釈する枠組みのようなものである。社会性とは、他者の心的状態を理解し、行動することでもあるため、社会性を考える上で、心の理論を1つの軸にして、検討していくことは有益と考えられる。

心の理論が大きく発達することで、子どもは幼児期になると、嘘をつけるようにもなる。嘘をつくには、他者が知っていることと知らないことを把握し、他者の知らない誤った情報を意図的に伝える必要があるからである。また、道徳的判断においても、幼いころから、意図的な悪事の方が偶発的な悪事よりも悪いと認識することが知られている。このように、嘘や道徳性を例として考えるだけでも、幼児期に社会性が高まる様子が明らかになる。しかしながら、こうした幼児期の社会性は、文脈によって変化する要素は少なく、「定型的な反応」が主となる (e.g. Talwar & Crossman, 2012)。一方、児童期になると、文脈を読み取り、状況に応じて柔軟に反応を変えることができるようになる。たとえば、状況に応じて他者を守るために嘘をついたり、あえて本当のことを伝える場面があるという理解も進んでいくことが知られている (Hayashi & Shiomi, 2015)。このように、幼児期と児童期では、社会性について質的な違いが存在する (e.g. Hughes, 2016; Miller, 2012)。

本研究では、この差を生み出す一つの切り口として、「察する」心に注目した。「察する」とは、他者の考えや気持ちをその場で正確に推測すること (『大辞林』など) を意味する。つまり、「察する」とは、心の理論を単に働かせるだけでなく、その場の文脈を読み取り、状況に応じた柔軟な社会的反応ができることを指すと考えられる。

本研究では、社会的な場面として、第1に、分配場面に着目した。状況に応じて報酬をいかに分配するかは、社会性や道徳の本質にかかわる問題である。これまでの研究から、自分が分配を受ける当事者になる場合、4~5歳頃までは利己的な判断が強いが、その後、平等な分け方を好むようになる様子が知られている。さらに、状況に応じて、より多くの作業をしたものには、より多くの分配を受けるべきであるといった公平性の観点も発達する様子が知られている。第2に、幼児期に着目し、意図の違いをどのように自己調整に反映させるのかを見ることで、幼児の自己調整の発達を詳しく検討した。幼児の自己調整は年齢が上がるにつれて、自分と他者を考慮するようになる。この自己と他者の双方を考慮する自己調整方法は「自他尊重」と考えられる。第3に、私たちは自分がどのような人物であることを表現したり演出することで、対人関係を作り出すことがある。このような自己呈示は、状況に応じて柔軟な行動が求められる重要な行動の1つと考えられる。本研究では、これら3つが検討に値する対象として有益と考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究では、「社会性を支える『察する』心の働き」に着目し、その発達過程を幼児期から児童期の子どもと大人を対象にした実証的研究によって明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

1つ目の分配の好みに関しては、大人を対象に実施した。一般に、公正な分配を主張する人は不公正な分配を主張するよりも好意的に評価される。これまでの研究から、報酬分配の場面において、自分に損な主張と知覚された場合は好意的に評価され、自分に得な主張と知覚された場合は非好意的に評価されることが知られている (e.g. 奥田, 1984)。しかしながら、日常を振り返ると、報酬などのようにもらうと嬉しい利益の分配だけでなく、責任のように多く配分されることが望まれない分配も見られる (e.g. 戸田・橋本, 2013; Hashimoto & Toda, 2019)。そこで本研究では、こうした先行研究を参考にして、大学生を対象に、報酬と責任の取り分について、「自分に得な意見を述べる人物」と「自分に損な意見を述べる人物」を提示した。その後、それぞれの人物に対する好感度を7段階 (7: とても好感が持てる ~ 1: 全く好感が持てない) で回答しても

らった。

2 つ目の自己調整の理解については、対人葛藤場面を提示し、行為者の意図を問うとともに、参加者自身が主人公であった場合に、どうするかを尋ねた。具体的には、選択カードを用いて「こんなとき　くん(ちゃん)ならどうするか」を尋ねた。カードは「行動型」「発話型」「行動抑制型」の3枚とした。「行動型」では「お友達から何も言わずに取っちゃうかな(取り返すかな)」、「発話型」を提示する時には「お友達に何か言うかな」、「行動抑制型」を提示する時には「何もせず我慢するかな」とそれぞれ尋ねた。幼児が選んだカードが「行動型」または「行動抑制型」であった場合、「どうしてそれを選んだのかな」と尋ねてもらい、「発話型」であった場合、「どんなことを言うの」と尋ねた後、「どうしてそう言おうと思ったのかな」と質問を続けた。

3 つ目の自己呈示に関しては、他者からの承認を得たり、否認を避けたりする重要な行動だと考えられている。これまでの研究から自己呈示には、自分の能力や性格を誇張する方向の自己高揚と、自分の能力や性格を控えめに提示する方向の自己卑下の2つのタイプがあるとされ、対人場面における社会的技法として注目されている。ここでは、先行研究を参考に、小学生と大人を対象とすることで、2つのタイプの自己呈示の理解の発達について予備的に検討した。

#### 4. 研究成果

本研究では、状況に応じて柔軟な行動が求められる社会的な場面として、3つに着目して検討を進めた。その結果は、大きく以下のようにまとめることができる。

1 つ目の研究については、全体として、奥田(1984)と同様に、損な意見と判断されれば好感度は高くなり、得な意見と判断されれば好感度は低くなった。また、全体的な好感度は、報酬の分配の方がやや高かった。すなわち、分配に対する考え方が、その人物の好感度に大きな影響を与えることが追認されたとともに、これまで明らかになっていた分配に対する好みについて、分配の種類の違いが明確になった。

2 つ目の研究については、幼児の回答を、自分の欲求や意志を尊重する「自己尊重」、他者の欲求や意志を尊重する「他者尊重」、自分の主張と相手の主張を尊重する「自他尊重」、どれにも属さない「その他」に分類した。幼児は意図を理解していたとしても、それを自己調整には反映させない可能性が考えられたが、全体的に幼児は自他尊重に分類される回答が多く見られた。自他尊重が、他律的なものから自律的なものへと変化していく過程で身につけられるものだと考えられることから、その発達には他者とのかかわりが重要であることが示唆された。

3 つ目の予備的研究については、全体的な傾向として、児童期に大きな変化が見られ、高学年では大人の理解に近づいていた。自己呈示を理解する上では、自己呈示者が他者にどのように評価されるのかによって自己呈示の意味が変わるため、複雑な心の状態の読み取りが必要になる。児童期は、二次の心の理論が発達する年齢でもあるため、今後は二次の心の理論の働きとの関連も検討することが有益と考えられた。以上より、自己呈示の理解の発達について明確にすることができ、社会性を支える上で、察する心に関して、一步深いレベルで検討することができたと考えられる。

本研究においては、以上のような知見が得られた。しかしながら、状況に応じて対応が変わる社会的な場面は、日常的に他にも多様な場面がありうると考えられる。たとえば、児童期になると、状況に応じて他者を守るために嘘をついたり、あえて本当のことを伝える場面があることも理解が進んでいくことが知られている(Hayashi & Shiomi, 2015)が、嘘のレベルによっても、理解の度合いの違いがあるかもしれない。このような嘘は、秘密を守るという視点からも考えることができるかもしれない。また、自己呈示の場面も、児童期に理解がますます深まるが、過去の経験や行動の違いによっても、同じ自己呈示を持つ意味合いは変わりうるであろうし、今後の人間関係の継続性があるか否かによっても変わることだろう。場合によっては、社会学など心理学以外の学問の知見とリンクしていくことも考えられ、それによって、応用的なことも見いだされるかもしれない。

今後は、さらにさまざまな場面を検討したり、中学生や高校生など青年期も対象に加えたりするなどによって、児童期から大人になるまでの、察する心にかかわる社会性の発達をさらに深く探究していくことが望まれる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hayashi Hajimu, Mizuta Nanaka	4. 巻 215
2. 論文標題 Omission bias in children's and adults' moral judgments of lies	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Experimental Child Psychology	6. 最初と最後の頁 105320 ~ 105320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jecp.2021.105320	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hayashi Hajimu, Ban Yoshimi	4. 巻 18
2. 論文標題 Children's understanding of unintended irony and unsuccessful irony	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 European Journal of Developmental Psychology	6. 最初と最後の頁 230 ~ 256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17405629.2020.1783528	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藪田小百合・林 創	4. 巻 14
2. 論文標題 自己と他者の関係に着目した幼児の自己調整機能の発達	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 147-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hayashi, H. & Nishikawa, M.	4. 巻 185
2. 論文標題 Egocentric bias in emotional understanding of children and adults	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Experimental Child Psychology	6. 最初と最後の頁 224-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jecp.2019.04.009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayashi, H.	4. 巻 181
2. 論文標題 Do 5- and 6-Year-Old Children Attempt to Appear Fair to Others?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of Genetic Psychology	6. 最初と最後の頁 150-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00221325.2020.1738321	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 林 創・沖野資也
2. 発表標題 分配に対する考え方が生み出す好感度の差異
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hayashi, H.
2. 発表標題 Young children attempt to appear fair to others in resource distribution
3. 学会等名 BPS Cognitive Psychology Section & Developmental Psychology Section Joint Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 創・伴佳美
2. 発表標題 子どもにおける意図と解釈に違いがある皮肉の理解
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayashi, H.
2. 発表標題 Omission bias in children and adults for antisocial and prosocial situations.
3. 学会等名 25th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hayashi, H.
2. 発表標題 Development of children's flexibility in deception and moral judgment.
3. 学会等名 BPS Developmental Psychology Section Annual Conference 2018 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 創・西川未菜
2. 発表標題 他者の感情理解における子どもと大人の自己中心性バイアス
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 創
2. 発表標題 幼児は他者に公平であると見せかけようとするか？
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計7件

1. 著者名 下山晴彦・佐藤隆夫・本郷一夫（監修）・林 創（編著）・藤澤啓子・旦直子・篠原郁子・中道圭人・小川 絢子・近藤龍彰・磯部美良・浅川淳司・山田真世・畑野快・澤田忠幸・西田裕紀子・加戸陽子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 191
3. 書名 発達心理学	
1. 著者名 糸井尚子・上淵寿（編著）・利根川明子・柏崎秀子・林 創・近藤龍彰・中野貴博・坂本美紀・伊藤貴昭・ 仲真紀子・篠ヶ谷圭太・富田英司・藤野博・奥野誠一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 189
3. 書名 教育心理学	
1. 著者名 稲井達也（編著）・岩見理華・林 創ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 159
3. 書名 高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント	
1. 著者名 荒木寿友・藤澤文（編集）・荒木紀幸・西野真由美・藤原孝章・山岡雅博・山辺恵理子・武藤世良・小田 亮・川本哲也・林 創・岡田有司・藤根基貴・上田仁紀・久保田笑理・堀田泰永・竹内和雄・木原一彰・幸 田隆・藤原由香里・星美由紀・鈴木憲・鈴木賢一・松尾廣文・高野阿草・六車加代	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 267
3. 書名 道徳教育はこうすれば<もっと>おもしろい 未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション	

1. 著者名 楠見孝(編著),野村理朗・高橋雄介・齊藤 智・後藤崇志・平岡齊士・溝上慎一・河崎美保・林 創・米田英嗣・土屋智裕・服部貴大・坂本美紀・Emmanuel Manalo・栗田季佳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 269 (149-165)
3. 書名 教職教養講座 第8巻 教育心理学	

1. 著者名 鹿毛雅治(編著),安藤寿康・皆川泰代・垣花真一郎・林 創・伊藤貴昭・伊藤崇達・松尾 剛・鈴木雅之・柘植雅義・小野昌彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 192 (45-62)
3. 書名 未来の教育を創る教職教養指針3 発達と学習	

1. 著者名 林 創(編著)・石川慎一郎・岩見理華・勝山元照・中垣篤志・平松はるみ・安田和宏・山本拓弥・若杉誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 220 (10-28, 147-153)
3. 書名 探究の力を育む課題研究 中等教育における新しい学びの実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------